

◆授業に関するアンケート◆

「2019 年度秋学期 授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長 若本夏美

はじめに

こんにちは。センター長の若本夏美です。

印刷物として出版されているわけでもなく、Web ページのリンクから開いていただくことが希少な中、このページを開いて(ダウンロードして)いただき、ありがとうございます。はじめにのページでは大抵、形式的な挨拶を書くことが多いのですが、今回は少し個人的な体験のご報告からスタートしたいと思います。少し長めの巻頭言です。

授業アンケートの結果を見ていると驚愕することがあります。授業アンケートでは必ず「コメント」を書いて欲しいとお願いしています。そこにはいつも授業を改善する教員側からでは気づかない「ヒント」が隠されている事が多いからです。しかし、2019 年度、丁度、21 世紀生まれの大学生が入学した時期にあたりますが、この年より微妙ですが変化を感じています。それは、これまでにないような「攻撃的な」コメントを時々目にするようになったことです。授業改善への意欲よりも絶望的な感じを味わうことがあります。

この 2019 年度秋学期についても「Career Introduction I」という授業(1 年次生に将来のキャリアを意識しながら充実した大学生の学びを促すことを目的)でそのようなコメントを目にしました。もう 10 年以上、その科目のコーディネーターを務め、年々、コースが充実してきたことを実感してきていただけに「そのコメント」を目にした際には愕然としました。ひと言で言う「よかれ」と思って私が一歩踏み込んで行ってきたことが、全く違う解釈がなされ、そこでは私の意図とは異なった受け取られ方がされていました。しかも書き方が新聞紙上で話題になるような SNS での炎上のような非常に攻撃的なものなのです。これは私の「個人的な体験」ですが、ひょっとしたら多くの教員が経験している問題なのかもしれません。

このような学生を内田樹は「消費者としてふるまう学生たち」(「サル化する社会」、p. 198)と評しています。消費者マインドを持って教室に登場した学生にとっては単位や学位は商品であると認識している(同掲書)、と。授業の中で何かのスキルを身につけさせたり、その向上を図る部分は沢山あります。しかし一方で、専門学校とは異なり、教員から又はアクティブ・ラーニングを通して何か新しい世界に触れたり、新たな発見をすることにより、より高い知性と品性を身につけてゆくのが大学教育の真髄であるはずで。特に、同志社においては更にその先に良心の涵養を目指しているはずで

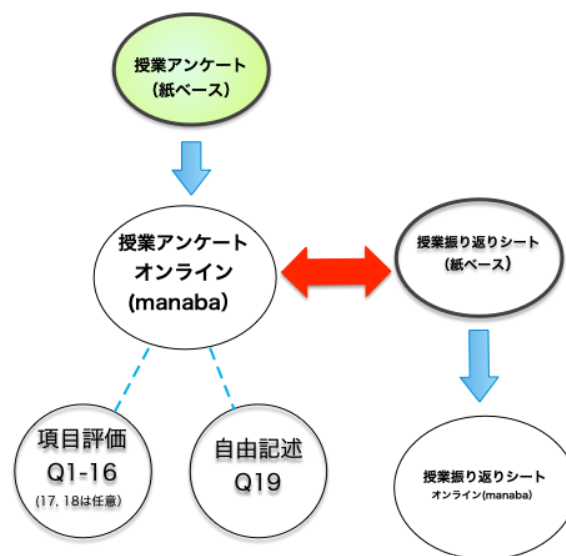


図 1. 授業アンケートの見取り図

す。私はこのようなコメントを目にした際に気をつけなければならないと、考えています。それは授業アンケートの結果を「気にしすぎてはいけない」ということなのです。SNS での「非難」と同様、自分は匿名により安全な場所に身を隠し、攻撃をしているという感じです。教員に反論するチャンスはなく、無防備で無力です。このような謂われのない非難もまた授業アンケートに紛れ込んできます。

と同時に、このようなコメントから学ぶこともあります。今回のケースも、160 名の内、1 名からのコメントでした。統計的には無視できる数値でしょう。しかし、一方では「これまでのやり方」がいつまでも有効とは限らないと、自分の肝に銘じる事もできるのだと思います。その意味では、授業アンケートの、特に自由記述の扱いについては「たかが・・・と、されど・・・」といった態度が必要なのかもしれません。

さて、同志社女子大学教育開発支援センターでは図 1 が示すように、授業アンケートは紙媒体からデジタルへ（manaba 上）、そして今後は、授業振り返りシートについても同様の移行を検討しています。

一方で、何事も便利になったからと言って、結果も良くなるとは限りません。2019 年度春学期の報告で、授業アンケート実施率が前学期の紙媒体実施より「約 20%近く」下がってしまったとご報告いたしましたが、今回はそれよりも更に「約 20%近く」下がり 58.3% になってしまっています（図 2）。

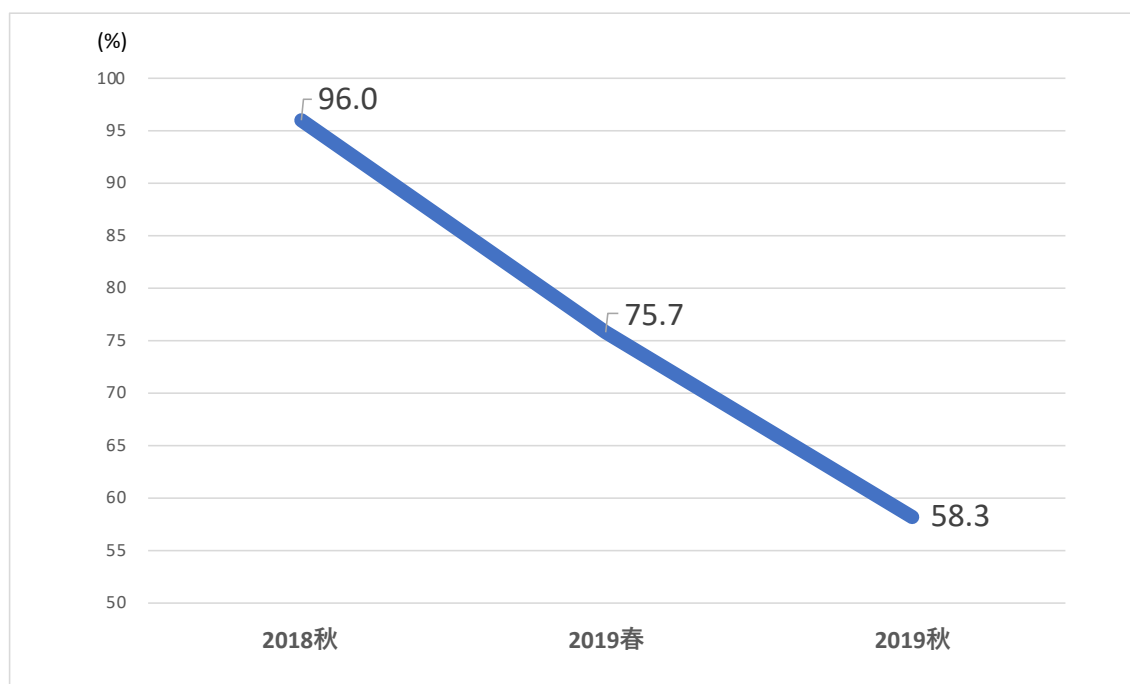


図 2. 授業アンケートの実施率推移（過去 3 学期）

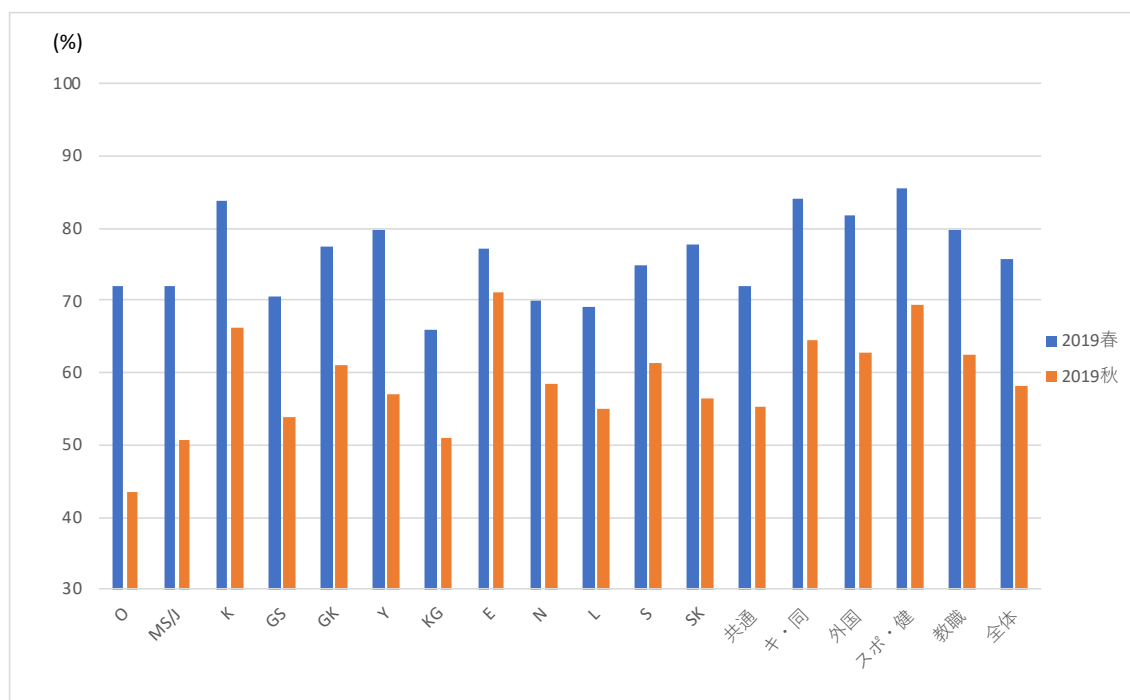


図 3. 授業アンケートの実施率推移（2019 年度春学期・秋学期）

私は前回この実施率低下の原因を「便利になったことよって、単に教員が授業アンケート実施を失念してしまったことがその最大の原因」（FD 13 号）と考えていました。そして、その対策として、全学教授会だけでなく、教育開発支援センター運営委員会で各学科から選出されている委員の先生方へ各学科での「声かけ」を依頼するなど、「アナログ的な対策（backstop）」（同掲書）を実行してきましたがまだ不十分であったようです。この件に関し、教育開発支援センター及び運営委員会（3 月開催）では以下のような意見が出されています。

- 実施期間の問題：問題点として、各科目担当教員が授業アンケートの回答を指示する前に、先に学生がアンケートを回答しているということが度々発生している。現行の設定では、学生が授業アンケートを回答した後は再提出ができなくなる。そのため、2020 年度春学期の実施期間については、昨年度通りのスケジュールでは 7 月 10 日に開始予定だったが、1 週間遅らせることにした。これにより、教員が指示する前に学生が先に回答することが避けられないかどうか、試してみる。
- 単位取得とリンクさせる問題：授業アンケートへの回答をしないと単位が出ない仕組みにしてはどうか。大前提として、本学の授業アンケートは、授業アンケートに回答することを成績評価基準にはしない、学生が任意に回答するという認識で始めた。そのため、もしそれを変えると根本的に覆すことになることを認識したうえで検討する必要がある。

ただ、「教員にとっても」「学生にとっても」授業アンケートが無くてはならないものになっていないという点が実施率低下の根本にあるのかもしれませんが。これまで度々、指摘してきましたが、諸外国と比較して日本の大学では教員も学生もひとつの学期に「多くの授業」を教えすぎ（教員）、履修しすぎ（学生）という問題が横たわっています。授業アンケートが教員にとっても学生にとっても「有益であるような」、いわば授業アンケートを実施することによって互いがベネフィット（Benefit）を得て、より授業が高度化、質の高い授業になっていく日本版・同志社女子大学版授業アンケートの仕組みを構築することが求められているのだと考えています。それは恐らく、冒頭の例のように、大学生がカスタマーであるのではなく、教員と学生が互いに協力しながらよい授業を作っていこうとする大学の知的環境と密接に関係してくるのだと想像しています。

(1)「授業実施に関する質問」の結果について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iv の 4 点を念頭に作成しています。

- i. 同志社女子大学ホームページにも掲載されている「2019 年度 秋学期授業に関するアンケート実施結果報告書（授業期間内実施科目）：全学及び各学科等別集計結果、学科等間比較資料」
(https://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_and_staff/support_center/quest/questionnaire_report) を参照（元データ）。
- ii. 11 学科び共通学芸科目、キリスト教・同志社関係科目、外国語科目、スポーツ・健康科目、教職に関する科目について、A) 全体の傾向、及び B) 前年度からの変化動向を検討。
- iii. 質問項目ごとの分析評価について：アンケートの質問は従来の 4 件法から 5 件法へ（1. そう思う [Agree]; 2. ややそう思う [Somewhat Agree]; 3. あまりそう思わない [Somewhat Disagree]; 4. そう思わない [Disagree]; 5. わからない [Don't Know]）。グラフ化するに当たっては、1-5 を逆転して点数化している。本来は、5 は「分からない」という回答であるので別基準とすべきであるが、今回の分析では単純に 1-5 を含め平均値を求めている。グラフ化にあたっては過去との比較を分かりやすくするために、1-5 を逆転している。

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
5	4	3	2	1

4 以上は強い肯定、4～3 は弱い肯定、3～2 は弱い否定、2 以下は強い否定を示す。

この総評は、既に教務部で分析された「報告書」をもとに総括することを意図しています。本格的な「分析」は今後、一次データに基づき統計的手法によって行うべきであることは言うまでもないところです。大学における IR（Institutional Research）に本学もそろそろ足を踏み入れる時期にあると思われます。

Q1. シラバスとの合致

全体結果：

「Q1: 授業内容はシラバスに合っていましたか」

図4の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.3を上回っていました。

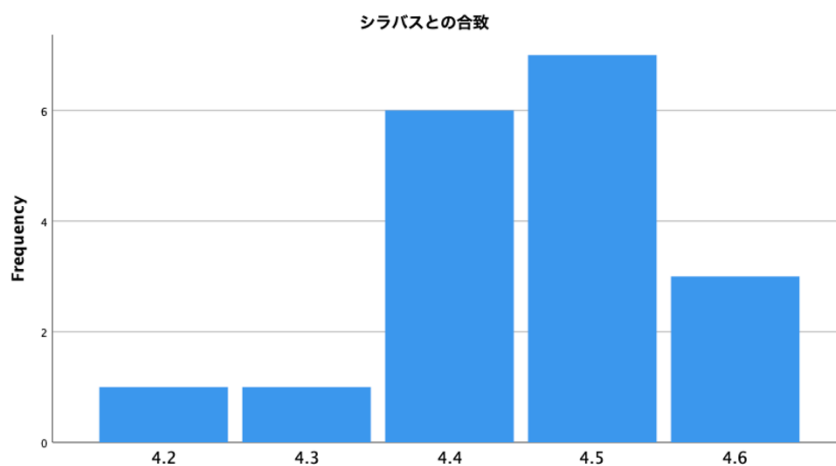
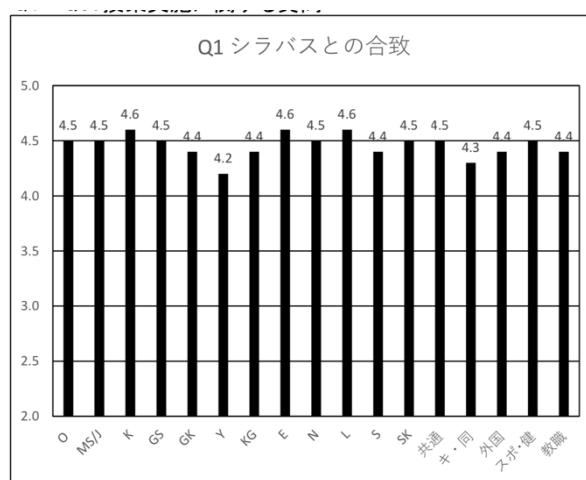


図 4. 学科・科目区分の分布 (Q1)

同じ区分の平均値が **4.46 (2019 年度春学期) → 4.45 (2019 年度秋学期)** と全体として高水準にあります。この結果から、全体的な傾向としてほとんどの授業でシラバスに沿った授業が展開されていたと評価できます。シラバスには特に評価方法についての記述もあります。シラバス通りに授業が行われることは学生にとっても教員にとっても「当然」と受け止められている傾向が進んでいると思われます。この点は同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後はより一層わかりやすく実現可能なシラバスの構成方法を議論する時期に達していると考えていいのではないかと思います。

学科・科目別：

どの学科も良好な状況ですが、特に、最多の学生を抱える社会システム学科において「4.5」という中央値以上の評点である点は注目されます。多くの学生が受講する学科でのシラバスと授業の合致は学科運営上重要であり、授業を円滑に進める基盤となると考えます。



Q2. 受講生の理解度

全体結果

「Q2: 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

図5の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

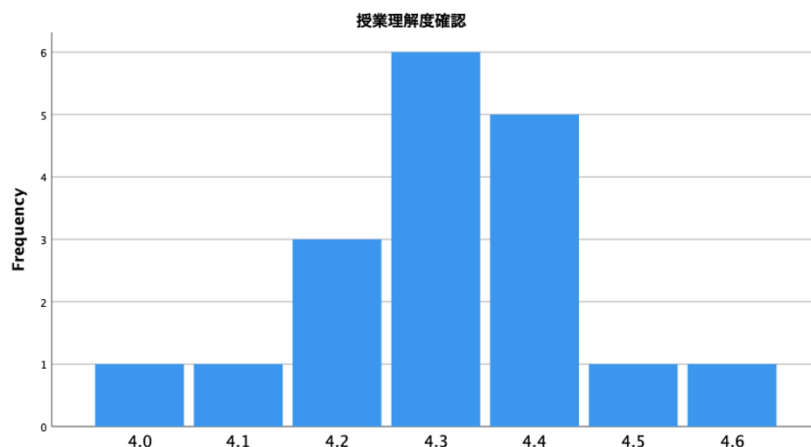


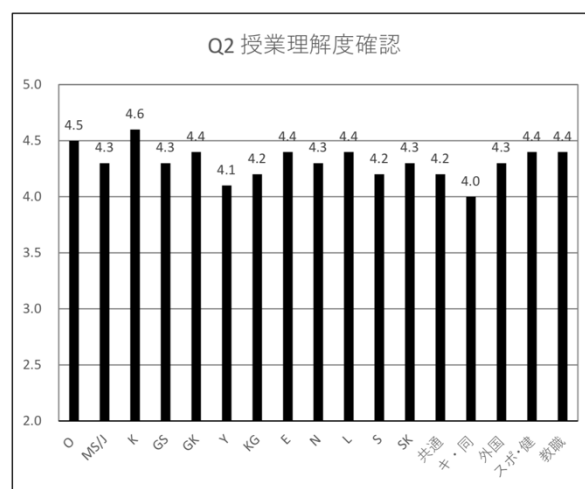
図 5. 学科・科目区分の分布 (Q2)

同じ区分の平均値が **4.30 (2019 年度春学期) → 4.31 (2019 年度秋学期)** と全体として高水準にあります。ただし、Q1 と比較すると学科間によるばらつきは多少あるようです。

「受講生の理解度を確かめながら授業を進める」ことはアクティブ・ラーニングの中核をなす部分であり、「学生に寄り添いながらきめ細やかな指導をする」ことは女子大学のリゾンドートルのひとつでもあります。今後はより一層理解度が確認できるような授業の在り方を、交流・共有しながら更に学生の理解度を確かめながら授業を進める工夫をする時期に差し掛かっていると考えられます。

学科・科目区分コメント

この項目、学科の定員やクラスサイズの大小によって影響されているようです。この点については SA (Student Assistant) や TA (Teaching Assistant) の活用など教員や学科での一層の取り組みが必要であることは言うまでもないところですが、学生/教員比率を下げるなど大学としての教育環境の一層の充実が求められるところです。日本語日本文学科 (4.3) は学科の規模との対比においては高水準にあると考えられます。



Q3. 授業レベル

全体結果

「Q3: 授業レベルは自分に合っていましたか」

図6の度数分布分析が示す通り、他の項目と比較してこの項目の分散が大きいことは明白です。

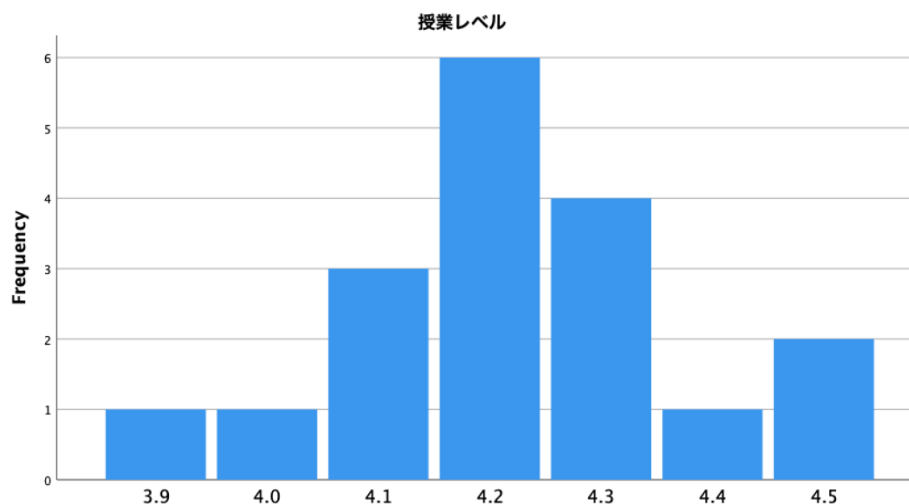
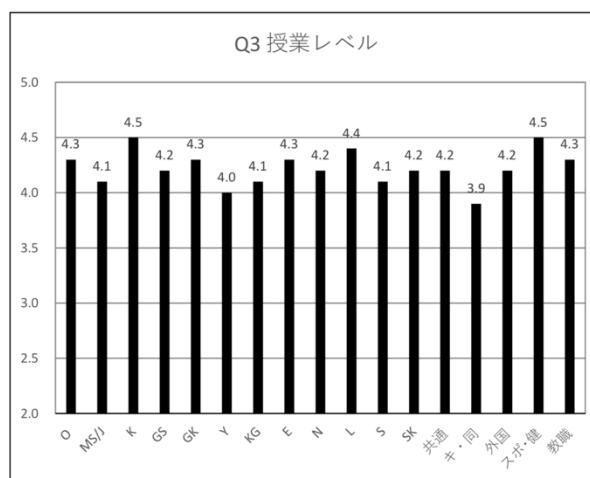


図 6. 学科・科目区分の分布 (Q3)

同じ区分の平均値が **4.18 (2019 年度春学期) → 4.22 (2019 年度秋学期)** と僅かですが全体として向上しています。これは学生の理解度を丁寧に確認しながら授業をすすめる工夫をするなど、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科・各科目区分で取り組まれた授業改善の成果にほかならないと評価できます。この問題は受講学生の学力レベルと授業目的との難しい関係に依存するところです。特に大人数クラスではレベル調整が困難となるのは必然的です。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

習熟度クラスなどクラス形態の工夫はひとつの方策であると考えられます。そのような中でも現代こども学科 (4.2) やスポーツ健康科目 (4.5) の高水準は注目されます。改善の方向についてはアクティブ・ラーニング研究会などを通し教員間で一層の情報交換が必要であると思われます。



Q4. 授業の双方向性

全体結果

「Q4: 教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は 受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか」

図7の度数分布分析が示す通り、この項目も課題を抱えていることが分かります。

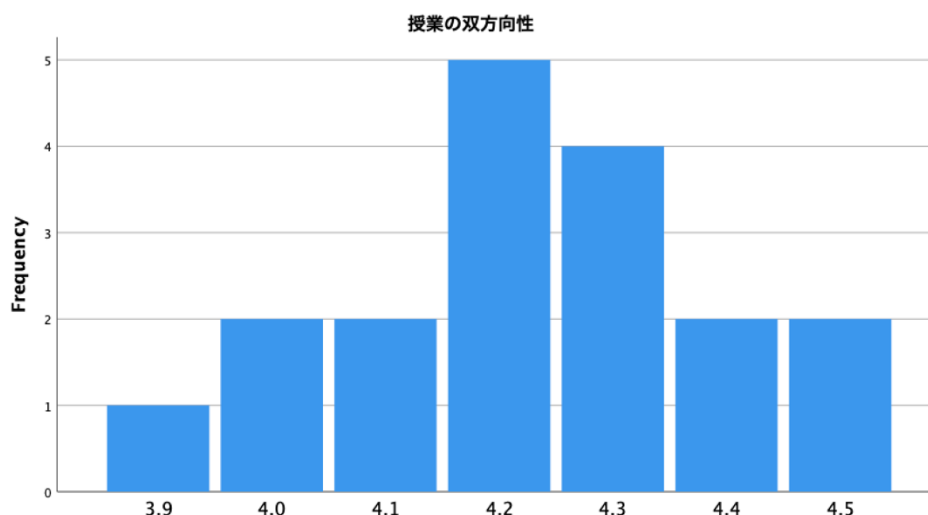
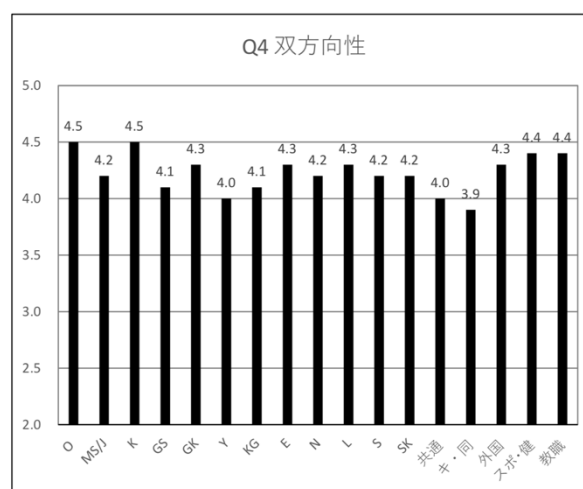


図7 学科・科目区分の分布 (Q4)

同じ区分の平均値が **4.23 (2019 年度春学期) → 4.22 (2019 年度秋学期)** と全体的な傾向として改善が進んでいると評価できます。双方向性のある授業はアクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。ICT も更に利用しながら一層の向上が望まれるところで。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。特に学科間の相違が大きな項目 (3.9~4.5) となっている点も注視する必要があります。

学科・科目区分コメント

特に、国際教養学科 (4.5) や英語英文学科 (4.3) の高水準が注目されます。スキル演習科目に留まらず、学生間のグループワーク、プレゼンテーションや振り返りなど、アクティブな授業運営がこの双方向性の核になると考えられます。多彩なアクティビティーを準備しながら、学生が授業内で声を発することができる授業デザインが一層必要になると思います。



Q5. フィードバック

全体結果

「Q5: 提出物に対するフィードバック(採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか」

図8の度数分布分析が示す通り、この項目も学科・科目区分で相違が大きな項目です。

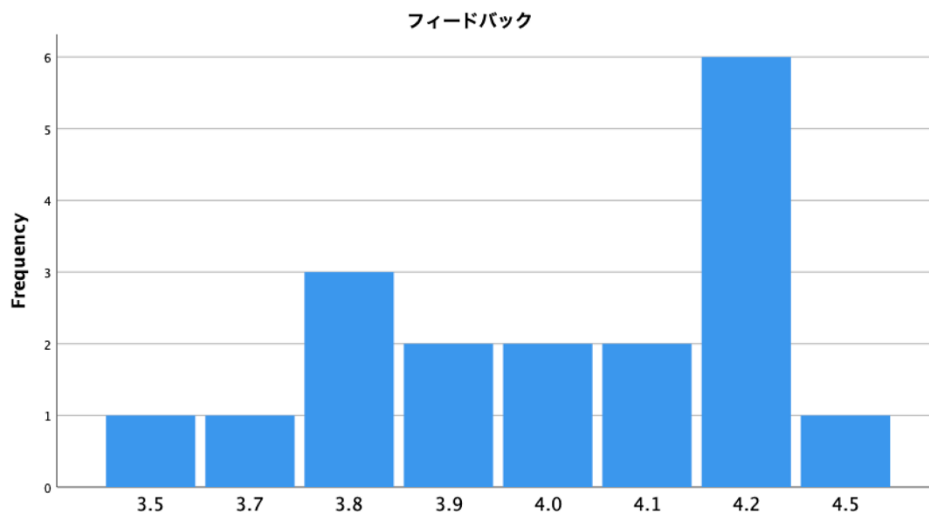
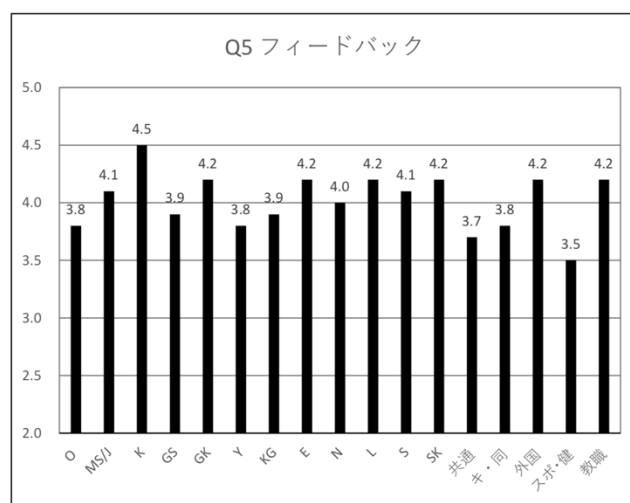


図 8. 学科・科目区分の分布 (Q5)

同じ区分の平均値が **3.96 (2019 年度春学期) → 4.01 (2019 年度秋学期)** と全体的な傾向として改善が進んでいると評価できます。フィードバックは、アクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。特に、マナビー(LMS)を活用することにより、「課題の提出 ⇄ フィードバック」が効率的にできると思われます。同志社女子大学としてはこの点については最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、こども学科 (4.2) の高水準が注目されます。重要なことは「出されたレポートは返す」というシンプルな原理だと思われます。添削などにおいても、学生が書いたもの全てについてフィードバックする必要は必ずしもないのかもしれませんが、むしろ、学生が次へのステップとなるようなポイントを押さえた「選択的な」指摘が効果的であると思われます。教員もエネルギー配分を考え、時間を効率よく使うことが出来ます。



Q6. 理解を促進する工夫

全体結果

「Q6: 言葉による説明だけではなく受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか」

図9の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

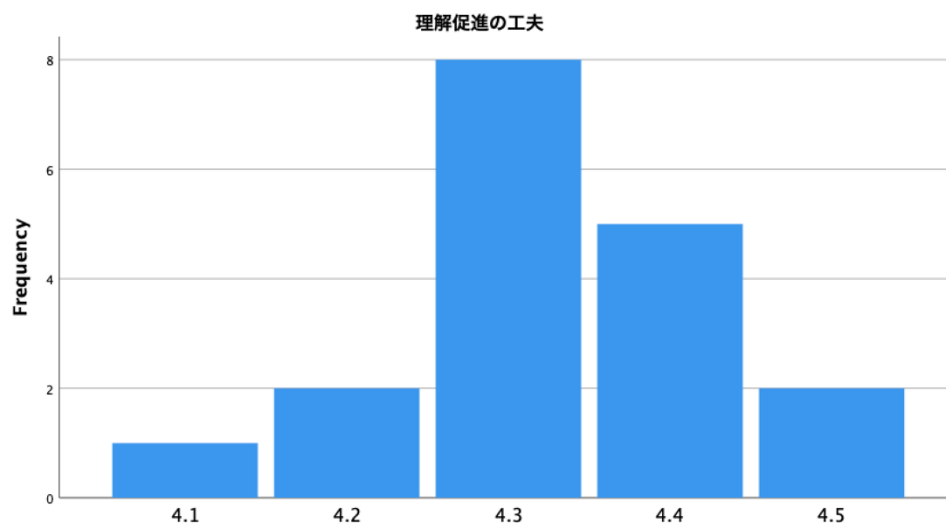
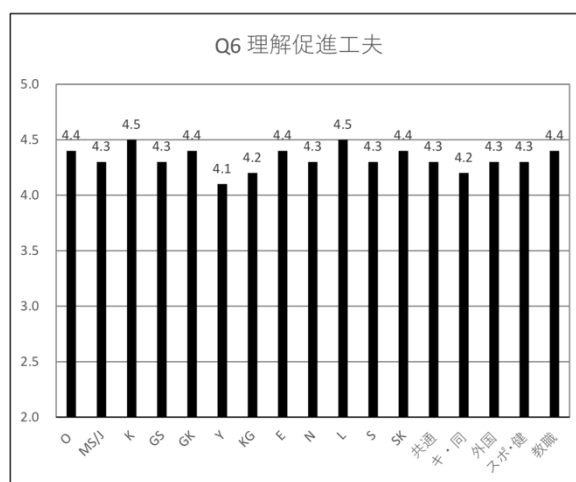


図 9. 学科・科目区分の分布 (Q6)

同じ区分の平均値が **4.30 (2019 年度春学期) → 4.32 (2019 年度秋学期)** と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。これはどちらかというと「当たり前」の質問です。数値が示す通り、どの学科・区分でも、4.0 以上の平均が得られ、多様な工夫がなされている姿が目に見えます。この点については同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後は質的な議論（どのような工夫）に移行する時期に来ているのではないかと思います。すなわち、具体的にどのような工夫がなされているのか、その工夫を集約して大学として共有してゆく方向性です。

学科・科目区分コメント

作業、制作、資料の提示や配布、映像等による説明、ロールプレイングなど多様な工夫が可能であると思われます。このような創造的な工夫はアクティブ・ラーニング研究会などを通して全学で共有したいものです。特に、音楽学科 (4.4) や人間生活学科 (4.5) の高水準が注目されます。



Q7. 自主学習

全体結果

「Q7: 自主学習を促す工夫がなされていましたか」

図 10 の度数分布分析が示す通り、同志社女子大学として次の Q9 と併せて、自主学習・学習時間は喫緊の課題となっています。

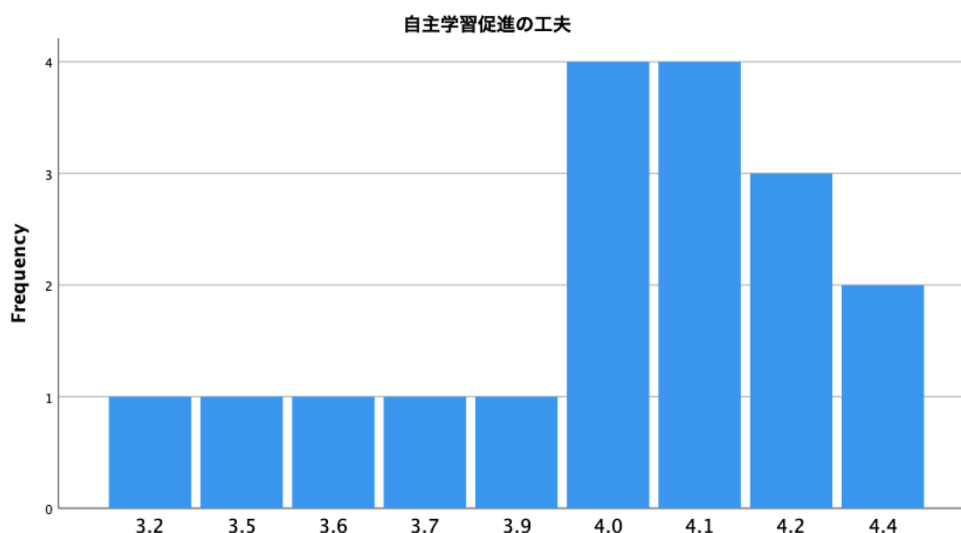


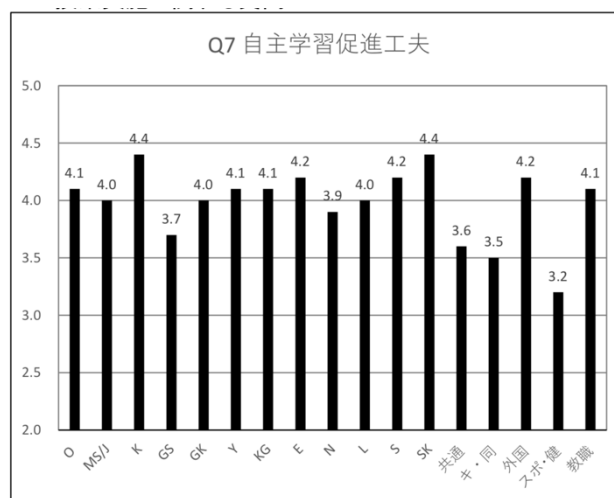
図 10. 学科・科目区分の分布 (Q7)

同じ区分の平均値が **3.95 (2019 年度春学期) → 3.98 (2019 年度秋学期)** と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。しかし設定されている項目の中で低い水準にあるのがこの質問です。もちろん、科目群によってはそれほど授業外学習が求められないかもしれません (スポーツ・健康科目群、3.2)。逆に外国語科目群の平均値が比較的高くなっているように (4.3)、復習や予習が必要となるものもあります。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「継続的に取り組む」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

自主学習時間を増加には各学科、苦渋に満ちた取り組みがなされていると思われます。そのような中でも管理栄養士専攻 (4.4) の高水準が注目されます。

いかに主体的な学習姿勢を習得・維持させるかについて継続的な議論が必要であると思われます。



Q9. 自主学習

全体結果

「Q9: この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。」

図11の度数分布分析が示す通り、興味深い結果です。

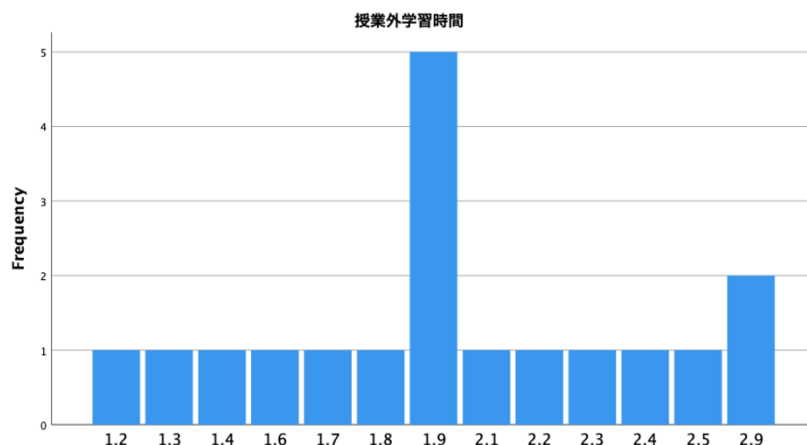


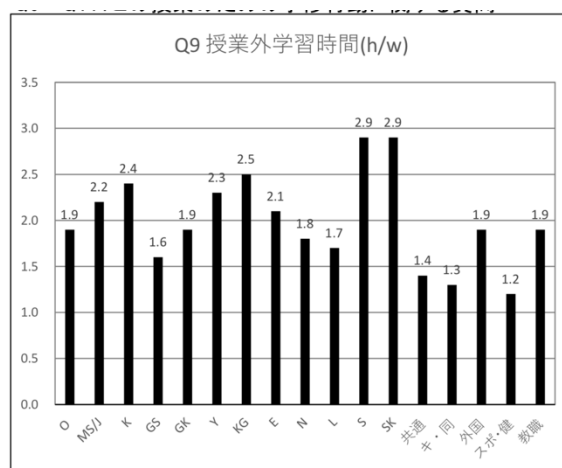
図 11. 学科・科目区分の分布 (Q9)

同じ区分の平均値が **1.92 (2019 年度春学期) → 1.98 (2019 年度秋学期)** と向上しています。設問が1週あたりの学習時間であることから、例えば、半期の上限の24単位(仮に1科目が2単位と設定)の授業科目を受講しているとする、1週間あたりの総学習時間は、 $1.9 \times 24 \div 2 = 22.8$ 時間、1日に換算すると(土日を除いて)、 $22.8 \div 5 = 4.56$ 時間となります。この信憑性については今後の検証を待ちたいところです。

学科・科目区分コメント

特に、医療薬学科 (2.3)、食物科学専攻

(2.9)、管理栄養士専攻 (2.9)、メディア創造学科/情報メディア学科 (2.2) で比較的長時間授業外学習に取り組んでいることが注目されます。国家試験であったり、実験やプロジェクトなどに取り組んでいることがその一因であると考えられますが、他の学科にもヒントになる秘訣が隠されているかもしれません。



Q10. 積極性

全体結果

「Q10: あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか」

図 12 の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

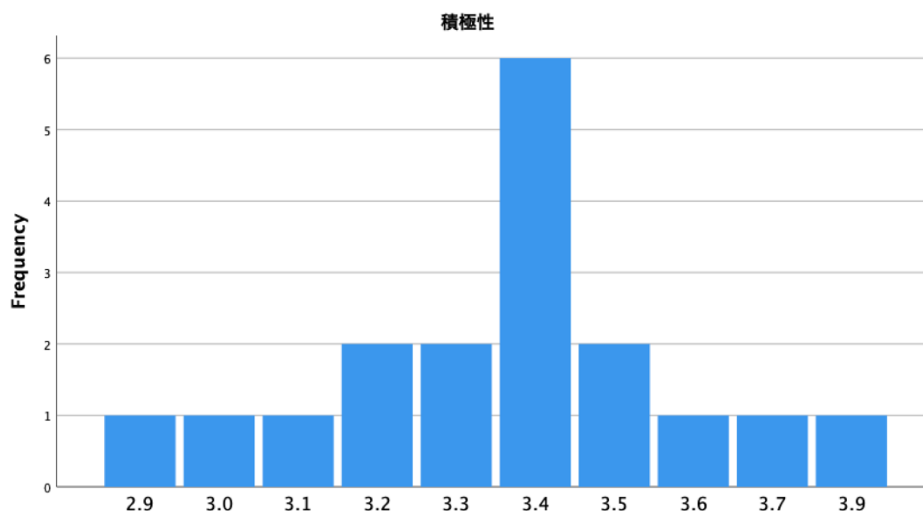
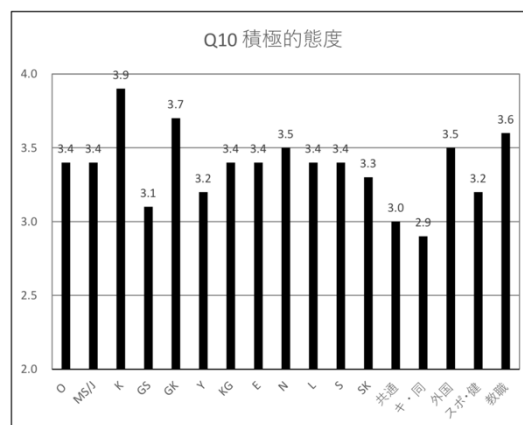


図 12. 学科・科目区分の分布 (Q10)

同じ区分の平均値が **3.32 (2019 年度春学期) → 3.36 (2019 年度秋学期)** と全体としては改善が進んでいると評価できます。しかし低い水準にあるのは間違いのないところです。ここからは、教師中心の・教える内容中心の授業が多いことが想像されます。アクティブ・ラーニングに象徴されるように 21 世紀の教育は「教師中心→学習者中心へ」そして「何を教えたか→何が理解できるようになったか・何ができるようになったのかへ」のパラダイムシフトがポイントです。しかし同志社女子大学ではまだパラダイムシフトは不発のようです。これは大学というよりはむしろ学生の意識がそのように変わっていないことにも問題はあると思います。同志社女子大学としてはこの点について、「最重点項目」として継続的に取り組んでゆく必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、教職に関する科目 (3.6) が高水準であることが注目されます。



Q11. 授業や関連分野への意欲

全体結果

「Q11: あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか」

図 13 の度数分布分析が示す通りですが、今後、どの分野においても就職後も継続的に新しい知識や技術が要求されると考えられます。このことから、在学中から関連分野の学習をさらに進めたいと思えるような授業の工夫が必要と考えられます。

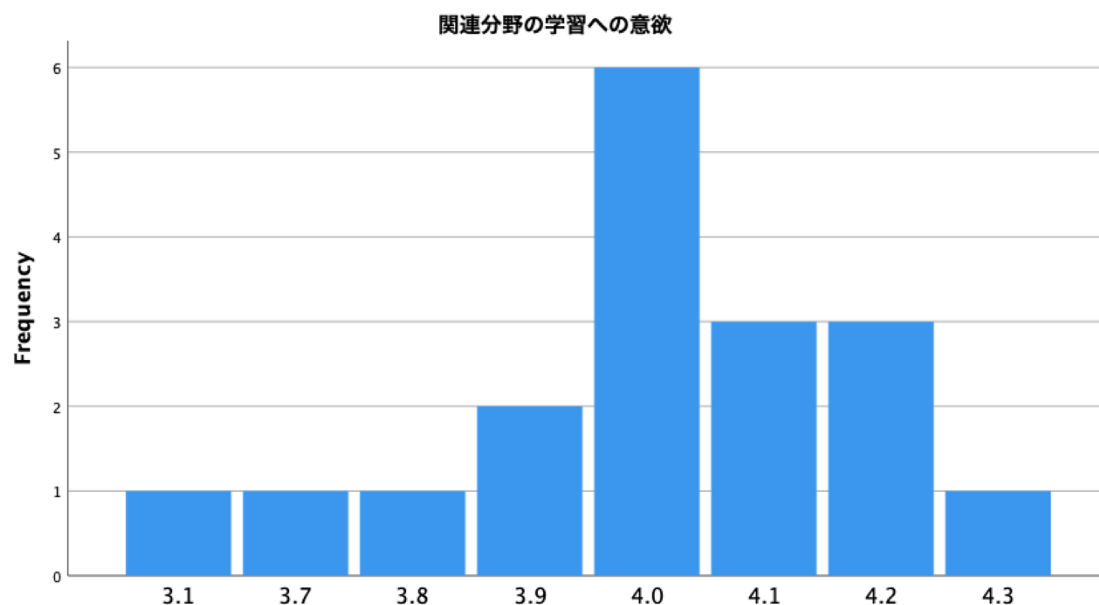
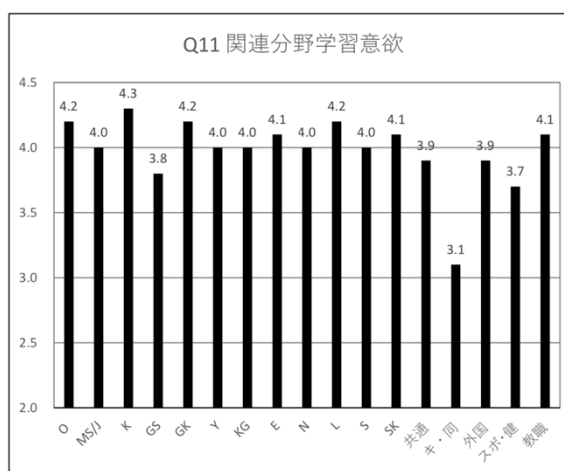


図 13. 学科・科目区分の分布 (Q11)

同じ区分の平均値が **3.98 (2019 年度春学期) → 3.97 (2019 年度秋学期)** と全体として高水準にあります。一方で、キリスト教・同志社関係科目に関しては、全学科共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。むしろ各学科の授業においても積極的に建学の理念やキリスト教主義への関連性を示唆することが必要なのかもしれません。また専門性を一層深めるとともに関連分野についての興味関心を深めるため、どの授業においても配布されている参考文献一覧にひと工夫凝らすことも考えられると思います。例えば、一覧表を提示するだけでなく、実際の参考文献を時々授業で紹介するいことも効果的かもしれません。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。



Q13. 到達目標達成への指導

全体結果

「Q13: 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか」

図 14 の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

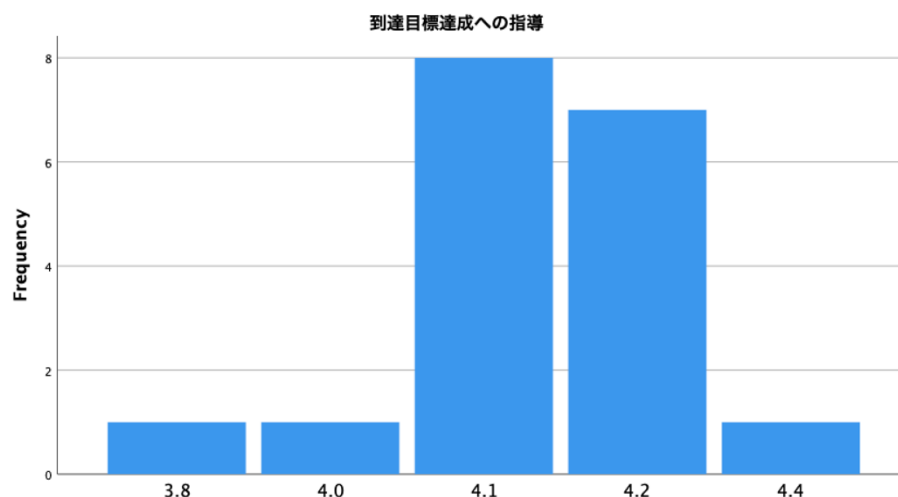
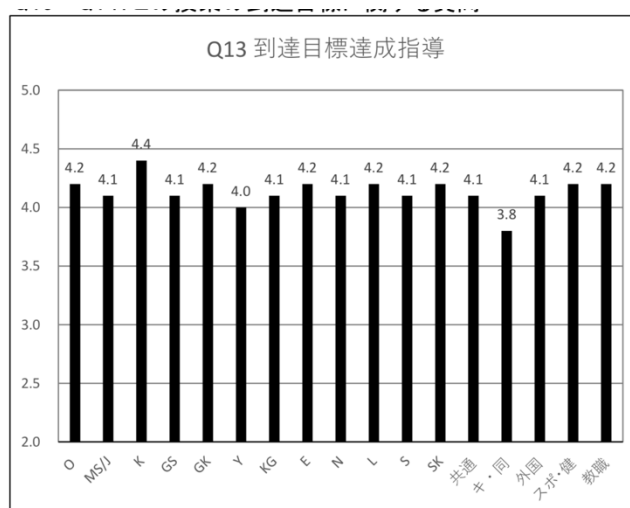


図 14. 学科・科目区分の分布 (Q13)

同じ区分の平均値が **4.10 (2019 年度春学期) → 4.13 (2019 年度秋学期)** となど好転傾向にあります。これらはいわば授業実施に関する Q1～7 の工夫や取り組みの成果が現れているものと考えられます。しかし、まだ十分な水準にあるとは言えません。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

一人ひとりの学生と時間をかけて向き合う姿勢が必要となる項目だと考えられます。そのような中でも、実習を含む看護学科 (4.1)、多様な言語を扱う外国語科目 (4.1) が高水準にあることが注目されます。



Q14. 到達目標達成

全体結果

「Q14: あなたは到達目標を達成できたと思いますか」

図 15 の度数分布分析が示す通りですが、学科・科目区分で相違が大きいのが特徴です。

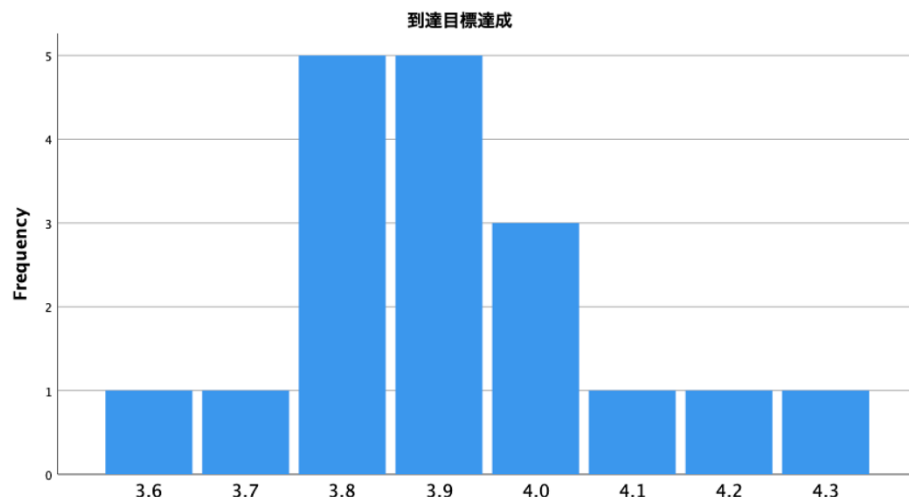


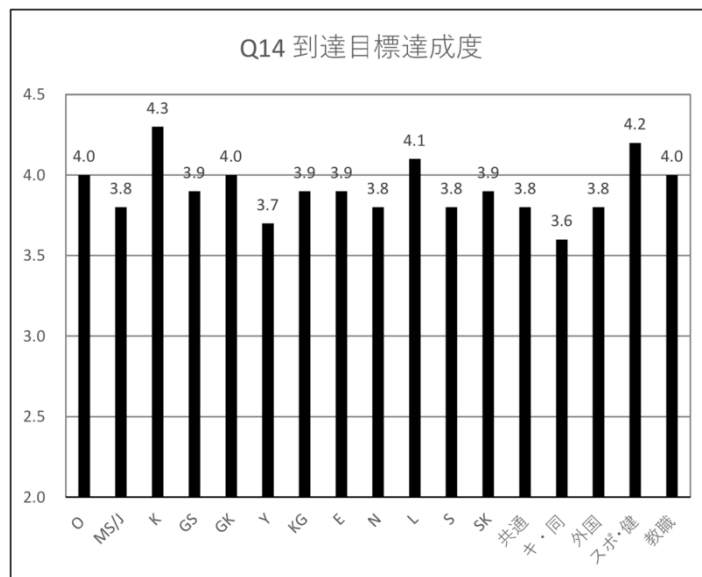
図 15. 学科・科目区分の分布 (Q14)

同じ区分の平均値が **3.86 (2019 年度春学期) → 3.91 (2019 年度秋学期)**、と全体としてはまだ十分な段階に達しているとは言えません。

学科・科目区分コメント

学科・科目区分で比較してみると、教職に関する科目 (4.0)、スポーツ・健康科目 (4.2)、国際教養学科 (4.3) など到達目標を比較的设置しやすい学科や人間生活学科 (4.1) が高く、キリスト教・同志社関連科目 (3.6) のように設定に工夫が必要な科目区分もあるようです。

また日本人特有の自己評価の低さという問題、学生自身が控えめで達成度を過小に評価する傾向があるのかもしれませんが、例えば、科目の達成目標—1つ1つの授業の達成目標の明確化、科目にもよりますが小テストなどの形成的評価の機会を多く持つなど、達成度が明確に分かるような仕組みも一層必要であるように思います。



Q15. DWCLA10

全体結果

「Q15: DWCLA10 の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2019 年度秋学期の特徴を、図 16 を参照しながら見ておきたいと思います。

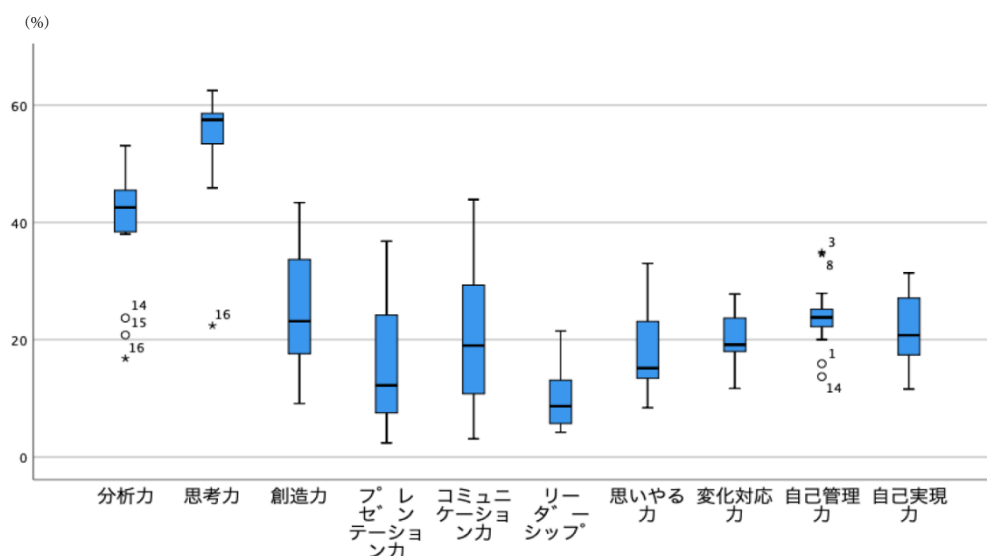


図 16. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10)

DWCLA10 の中で最も選択率の高かった項目は、**1 位) 思考力** ([2019 年度春学期、以下同様] 56.1 → 54.3 %)、**2 位) 分析力** (37.3 → 39.7 %)、**3 位) 自己管理能力** (22.2 → 23.8 %)、4 位) 創造力 (24.0 → 23.7 %)、5 位) 自己実現力 (20.4 → 21.5 %)。コミュニケーション力は (21.6 → 21.0 %) で 6 位でした。逆に低かった項目は、10 位) リーダーシップ (9.9 → 9.6 %)、9 位) プレゼンテーション力 (16.2 → 15.9)、8 位) 思いやる力 (18.2 → 17.3 %)、7 位) 変化対応力 (20.1 → 20.0 %) でした。春学期から大きく変化していませんが、プレゼンテーション力が低位にあるのはアクティブ・ラーニングの成果が十分浸透していないのでしょうか。

また、大学としては思考・分析力が上位を占めているというのは妥当であるように思います。DWCLA10 が出来てかなりの年月が経ちますが、一方でこの項目の再検討もする時期にきているのかもしれませんが。例えば、創造力に含まれるのかもしれませんが、アントレプレナーシップ（起業家精神）に関連して「問題発見→問題設定能力」は大学において育成すべき重要な項目であろうと考えられます。問題を教員が設定しているだけでは、リーダーシップも変化対応力も身につけません。

まとめ

結果分析を見られてどのような感想を持たれたのでしょうか？ここからは全体として同志社女子大学が少しずつではありますが、よい方向に向かっている姿が浮き彫りになってきていると思います。その中で、大学としてほぼ達成できた項目と今後力を注ぐべき点が明確になってきていると思います。

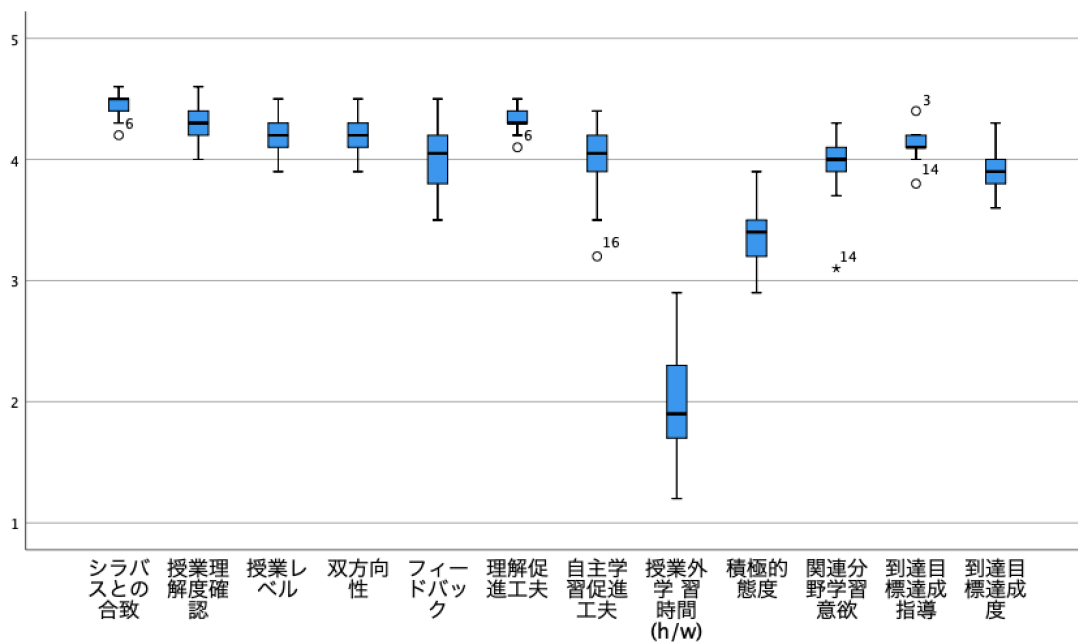


図 17. 授業アンケートの箱ひげ図 (Boxplot)

図 17 が示す通り、同志社女子大学として「今後重点的に取り組むべき項目」「引き続き改善に努めてゆく項目」「ほぼ達成出来た項目」が明確になっています。

1. 今後重点的に取り組むべき項目 (3 項目)

- 自主学習の促進 (Q7)
- 授業外学習 (Q9)
- 積極的に意見を述べる態度 (Q10)

2. 引き続き改善に努めてゆく項目 (5 項目)

- 効果的なフィードバック (Q5)
- 授業の工夫 (Q8)
- 授業や関連分野への意欲 (Q11)
- 履修理由の自己選択化 (Q12)
- 到達目標達成 (Q14)

3. ほぼ達成出来た項目 (6 項目)

- シラバスと授業の合致 (Q1)
- 受講生の理解度を確認しながらの授業展開 (Q2)
- 授業レベルとの合致 (Q3)
- 授業の双方向性 (Q4)
- 理解を促進する工夫 (Q6)
- 到達目標達成への指導 (Q13)

一方で総評を通していくつかの問題点も明らかになってきています。

- A) 授業に関するアンケート実施率の向上：冒頭でも述べましたが全学的に改善策を検討する必要があります。
- B) データの活用：蓄積されたデータを生かし切れてるとは言えません。これまでの膨大なデータから授業改善の方向性も見えてくると期待されます。IR の専門職の協力を得て精緻な分析が必要となります。
- C) 質問項目の再検討：達成された質問項目を削除し、重要な質問項目を組み入れていく必要があります。特に、新型コロナウイルスの世界的流行により 2020 年春学期はオンライン授業を余儀なくされています。このような授業形態に合わせた授業アンケートが必要です。
- D) 実施率向上のために：現在の 16 項目＋自由記述は授業アンケートとして多すぎるのかもしれません。「選択と集中」という観点から、質問紙開発プロセスで実施するような「項目プール」を導入することもひとつの手かもしれません。すなわち、その学期や年度に同志社女子大学として重点的に取り組む項目を決め、全項目数が 10 項目になるように毎回入れ替えをおこなう、という発想です。授業アンケートも DWCLA10 が導入されたり、振り返ってみると年々項目数が増加している印象を与えます。例えば上記の「ほぼ達成された項目」を次年度から除外すると質問項目は丁度 10 となります。

さて、2020 年代のはじまりはオンライン授業となってしまいました。慣れない授業準備や Zoom や Teams を使った授業に苦労は多いですが、全てが問題なわけではありません。オンライン授業により、私達はこれまで当たり前に行ってきた対面授業の本質、すなわち対面授業でしかできないことを少しずつ理解し始めているのではないのでしょうか。授業は一次関数のように一直線に発展していくわけではなく、いろいろな問題点を乗り越えようとする事を繰り返し、二次関数の如く、はじめは徐々に、そしてあるところから爆発的に向上してゆくものだと思います。ある意味では、リスクマネジメントの基本である「最高の状態を夢見ながら、最悪の事態に備える」そのような心構えが授業においても求められるのかもしれません。危機に陥るとこれまでともするとバラバラだった教職員も協力しながら対処しようとしします。そのような時にこそ、この授業アンケートの結果を冷静に見つめ、そこから得られる知見を役立てる必要があるのかもしれません。

教師が楽しそうに授業をすると学生もつい、つられて楽しくなるものです。いつも楽観的な心を忘れないよう、日々の授業改善に学生と同僚と協力しながら進んでいきたいものです。

All is well that ends well. (ウィリアム・シェークスピア)

参考文献：

内田樹 (2020). 『サル化する社会』 東京: 文藝春秋.